

文学作品講読の英語教育における可能性

古岩井嘉蓉子

教養英語としての文学作品の講読は、種々な問題をかかえている。例えば、教材のテキストとして文学作品を英語学習者（特に直接人文系学科に関係しない者）に与えるのは、好ましくないとか、又は、学生（主に理工系に所属する者）が読みたがらない、あるいは大学の中に文学作品をテキストに選ぶのを批判的に見る者が居るといった通俗的な理由があげられる。しかし、このような批判は別にして、もし教養英語として文学作品を扱うとしたら、一つの問題提起として、文体論的アプローチの講読を専門的文学研究（literary criticism）と言語学（linguistics）の狭間で、どのように位置づけて、どのように語学教育の中で生かしていったらよいかということが考えられる。

そこで、まず大学教育の目的から私なりに明らかにさせたいと思う。大学の教育の目的は、社会的実利にすぐ役に立つ人材の育成でなく、人間存在の根拠となる人間性（humanity）の育成を最も重要な柱とするべきである。現今の社会では、多くの人々が、人間の精神の在り所や、人間性とは何かということについて、種々な社会集団の制約をうけ、無関心になってきている。特に大量の情報とマスコミの渦の中に巻き込まれて、多くの若者は、自分自身の言葉を失いつつあると思われる。自分の魂の叫びや呼びかけが聞えないのは、言葉に対する感性の喪失が人間性そのものの喪失となっているからである。従って、そもそも言葉は何（What）であり、どのように（How）機能するのか、そして言葉が人間の精神を育み、又我々の意識を目覚めさせることによって、次の新しい世界が見えてくることを学生に感得させる必要がある。言葉に対する感性を育てるという文句は、抽象的で美的すぎるという批判があるかもしれないが、大学教育の目的の一つとして、各専門教育や技術修得の他に、言葉の感性を涵養することが必要な所以である。

それでは、この教育効果のために、どのように文学作品の講読と英語学習を捉えたらよいのかという問題がある。文学作品研究と英語学習を繋ぐものとして、文体論的アプローチが考えられる。まず教える者が、この文学研究と言語研究という二つの学問分野を認識し、言葉が人間の意志の伝達としての道具役割を遙かに越えて、適切な言葉は人間の感性を養い、そして我々に人間性の真実を実現させることができるということに気づかなければならない。そのために、文学研究と言語研究の中間に位置づけられると考えられる文体論的方法について整理をしてみる。

そもそも文体論 (Stylistics) は、他の言語学や文学研究のように一つの独立した専門分野として充分認められた学問とは必ずしも言えない。ある時は、文学作品研究に近く考えられたり、ある所では、言語学の分野に入れられるといったことは、文体論が、この二つの学問分野の中間的な位置と役割を持っていると言えるからである。というのは、文学研究家は、作品の内容、メッセージに興味があり、一方、言語研究者は、その作品の言葉の記号自体に関心があり、特に、その言語記号が、いかに (How) 組み合わせられているかといったことに注目する。ここに仮に、ある文学作品があるとすると、それらの作品は、どのような言語的特徴を示し、又新奇な言い回しや用法があれば、これらは、文法という枠組でいかに (How) 説明されるかということに言語の研究者は興味がある。そこで言語研究者が美的経験や現実に対する文学的直観力を、そして文学研究者が言語に対する観察力を、養うことによって、文体論は文学研究と言語学的研究の二つを結びつけることができると考えられる。言語研究が各々の文学作品について、どのような言語特徴が挙げられるかということを追求するならば、その文学作品を言語学のテキストとしてみなすことができる。その文学作品は、テキストとして二つの理由で言語研究者の注意を引くからである。一つは、言語学的記述のモデルという点から説明できるような資料を提供してくれること、もう一つは、逆に、その言語理論では説明できないような言語資料が文学作品には、時々見かけられる点である。一方、文学研究者は、文学作品をメッセージとしてみるわけである。言語の組み合わせによって出来上っているテキストの一つ一つの言語要素が結合して、メッセージがいかに (How) 作り上げられているのか、云いかえれば、文学作品は読者にメッセージを伝えるのに、いかに (How) コミュニケーションの一

つの形式として機能しているかについて、文体論的研究は、何らかの示唆を与えてくれる。このように文学作品の内容 (message) とその言語形式 (linguistic system) の間を結びつけるものとして《文体》の存在を考えるのである。文学作品の講読と語学教育の間に文体論的アプローチを位置づけ、いかにして文学作品としての価値を生むために、相応しい言葉が作家によって発見され、‘人間’、‘世界’、‘生きること’、‘存在すること’が、そこに刻みこまれているかを教師自身がまず自覚しなければならない。現在の語学教育に欠けているのがこの点だと思う。日常生活のコミュニケーションや科学的情報を伝えることが学習の目的とされる言語レベルでは、情報内容と事実だけが伝えられるような語学能力の訓練だけでよいかもしれない。もしこのような情報伝達や日常の出来事だけのための語学教育しか存在しないとしたら、本来の意味での言葉は忘れ去られてしまうであろう。どのように伝えられたかについては、問題にならないから、内容と事柄しか頭に残らないということさえある。

そこで次の問題として作品のどこに焦点を当てていくのかということが考えられる。すなわち、第一は、ある作品の言語特徴を取り出して言語学的に整理を試みるのを目標とするのか、第二には、その作品に際だって見られる固有の特徴を選び出して、その作家の研究の手懸りとするのか、第三には同一作家の他の作品の言語特徴と比較してその作品について論ずるのかといった目標が挙げられる。この三つの区分のうち、第一のものは、言語学的文体論 (Linguistic Stylistics 又は Stylo-linguistics) といわれるもので、客観的方法による言語体系の枠組をもって記述することによって文体研究の糸口を求めるので、分析者の印象や直観や作者への言及といったものは、避けなければならない。言語学的枠組をもって文体記述の方法を設定するのが言語学的文体論の役目であるが、文学作品を性格づける形式的な言語特徴を見つけ出すのに、どのように言語の多様性を観察し、そしてその言語形式とその用法との関係をいかに記述するかの問題は、David Crystal の *Investigating English Style* (1969) の中にも述べられている。Crystal によると (1) 作品における文体上有意義な言語特徴を検出し (2) 何故そのような表現が用いられているのかを説明し、更に (3) それらの表現の機能を社会的コンテキストの中で分類整理することが文体論の目標であるとしている。

そこで、(1)の項目に当る‘作品における文体上有意義と思われる言語特徴を検出する’ということを中心に、言語学中心の分析の一つの例として、E. Hemingway の『老人と海』の分析の一部をとりあげ、それが大学での英語教育上どのような意義があるかを簡単に述べてみたい。

E. Hemingway の代表作の一つである『老人と海』の述語動詞 (predicate verb) の型、並びに動詞と主語との意味関係 (主語の選択と格関係) を取り出して彼の文体の特徴の一片を検出することができるだろうと考えるからである。

第一に、A. Hornby の『英語の型と正用法』(*a Guide to Patterns and Usage in English*) に出ている文型に沿って、『老人と海』の文を整理する。しかし、一部の文型が Hornby のテキストに記載されない文型で、しかも Hemingway が『老人と海』の作品の中で、しばしば用いる文型を E_{26} として加える。 E_{26} の項目は次のような型である。(1) 省略文。e.g. ‘We have’, ‘I can’, ‘Between fishermen’ (2) 一語よりなる情報。e.g. 感嘆文。‘What!’, ‘Fish!’ 非感嘆文。‘Yes’, ‘Perhaps’ (3) 口語表現における慣用句。e.g. ‘of course’, ‘What about……?’ (1)~(3) までの項目の例文が示すように、これらの文は会話の中で多く見られるのである。(4) ‘noun+I/He thought’ より構成される断片的な文 (fragmental sentence)。e.g. ‘a fish, he thought’

これら E_{26} の文型と S+V+(that) clause as object が各々約4%の値を示し、他の頻度数の少ない文型のものと比べると、比較的多く使われているのである。この S + V + (that) clause as object の文型について Hornby は意見、判断、信念、想像、宣言あるいは精神的活動等を示すような動詞の後に節を使う方が、S+V+(Pro) noun+(to be)+complement の文型より碎けた文体としてより一般的であるという説明をしている。(Hornby 1953: 22)

Hemingway の文体は、ことばの自然な流れと単文を更に短くした語句を強調させたような American English であると云われているが、まさしく『老人と海』の作品に於ては、この E_{26} の中の断片的な文が作品を特色づけている一つの要素といえる。特にこの小説を通して E_{26} の型を数多く用いるのは、ちょうど詩人が適当な語句を選ぶように、意識的な手法といえる。 E_{26} の中の ‘NP+I/He thought’ は全体の組織とは、何ら関係がな

いようにみえるが、主人公の老人自身が読者に語りかけているかのように、Hemingway が老人の気持を描写しようとするパラグラフに於て目立っている。

The wind is our friend, anyway, he thought. Then he added, sometimes. And the great sea with our friends and our enemies. And bed, he thought. Bed is my friend. Just bed, he thought. Bed will be a great thing. It is easy when you are beaten, he thought. I never knew how easy it was. And what beat you, he thought. (E. Hemingway, p. 111, ll. 1-7.)

こうして一つ一つの文を整理していくと、他の言語的特徴に気づく。例えば、それぞれのパラグラフの中のすべての文が凝集するように、同一のパラグラフの中では同じ動詞の型（文型）を繰り返し使用しているということである。

The old man was thin and gaunt with deep wrinkles in the back of his neck. The brown blotches of the benevolent skin cancer the sun brings from its reflection on the tropic sea were on his cheeks. The blotches ran well down the sides of his face and his hands had the deep-creased scars from handling heavy fish on the cords. But none of these scars were fresh. They were as old as erosions in a fishless desert. (pp. 1-2.)

第二の分析段階として、それぞれの文型に分類された13種類の文型を選び、その中から主語と述語動詞の意味関係を調べてみる。簡単に述べると、次のようになる。

述語動詞との役割関係（変項）を記述するための用語とその定義は、基本的に C. Fillmore によって定められた格文法に従う。動詞と主語の意味関係並びに変項 (argument) の数に沿って、動詞をグループ分けするために、11種類のタイプを仮に設定する。このタイプは主語の名詞（句）の機能に基づいて分類するが、意味関係における役割の定義の曖昧さのために、これらの仮のモデルに従って主語を機能別に分けるには、かなり無理が予測される。しかしここでは動詞の型の用法を知るための指標として、格の概念を取り入れてみる。

Fillmore は彼の論文の中で次のように述べている。「述語動詞は、その

動詞の機能別によるタイプの分類表

- タイプⅠ—主語の名詞（句）が受動者（対象格）（Patient）として。e.g. The door opens. Bill was hit by John.
- タイプⅡ—主語の名詞（句）が行為者（動作主）（Agent）として。動作主とはその動詞が表わす行為の扇動者として考えられる。通例、生き物とする。自然の力もしくは機械等の力は除く。teach, learn, buy, sellのような動詞である場合は、源泉格（起点）（Source）又は、目標格（着点）（Goal）でもあるような動作主格（Agent）をも含む。e.g. I teach English. I row a boat.
- タイプⅢ—主語の名詞（句）が具格（道具格）（Instrument）として。道具格とはその動詞によって示されている行動あるいは状態に係わるような無生物の力又は物をさす。e.g. The hammer struck the nail.
- タイプⅣ—一つの変項が二重の機能を持つ。すなわち主語は動作主格（Agent）であり又受動者（Patient）であると考えられる場合。e.g. I ran down the hill. She got up early.
- タイプⅤ—タイプⅣとタイプⅡの中間的なタイプ。e.g. I cried myself to sleep.
- タイプⅥ—主語の名詞（句）が経験者格（Experiencer）として。経験者格とはある出来事に内面的に影響を被むったり、あるいはある状態によって性格づけられるような精神的働きを持つ生き物（animate being）。（E. Traugott 1972 : 36）e.g. I fear a lion. The boy knows the story.
- タイプⅦ—いかなる機能とも関係しないような動詞。（E. Traugott 1972 : 29）e.g. It rained. It snowed.
- タイプⅧ—譲渡可能又、譲渡不可能な物の所有者（Possessor）に関係しているような動詞を有する文。（E. Traugott 1972 : 35）e.g. I have a book. He has black eyes.
- タイプⅧ—主語の名詞（句）が所格（Locative）であるような文。所格（Locative）とは、動詞によって表わされている行動、あるいは状態の場所を示すような格。e.g. This house boat sleeps eight adults.
- タイプⅩ—主語の名詞が時間を示すような文。e.g. The time came.
- タイプⅪ—主語の名詞が受益者（Beneficiary）であるような文。e.g. Tom found the tickets.

動詞のとり変項の数に従ってまず記述される。」この考え方に沿って、次に、二つの変項を有した動詞いわゆる ‘two-place verb’ にAの符号を与える。e.g. We’ve made some money. (タイプIIA) 三つの変項を持つ動詞 ‘three-place verb’ にBの符号をつける。e.g. He put it on his shoulder. (タイプIIB) 四つの変項を有する動詞 ‘four-place verb’ にはCの符号をつける。e.g. The boy had brought them a two-decker metal container from the Terrace. (タイプIIC) O という符号を一つの変項を持つ動詞 ‘one-place verb’ につける。e.g. The boat moved steadily. (タイプIO)

まず Type I(主語の名詞(句)を受動者としてとる動詞)に属する型では、受身構文(73例)は、Type I の全数181例中50%に満たない。いいかえれば受身構文で表現されるよりも、むしろ受動者(対象格)を示す名詞が能動態の主語の位置に立つような動詞を選んでいるといえる。

1. And in the first light *the line* extended out and down into the winter. (p. 45 l.3)
2. The bird had flown up when *the line* jerked and the old man had not even seen him go. (p. 47 l.22)
 cf. he held *the line* tight in his right hand…… (p. 72 l.9)
 he settled *the line* across his shoulders in a new place
 and held *it* again with his left hand…… (p. 71 l.2)
3. *It (his left hand)* will uncramp though, he thought Surely *it* will uncramp to hold my right hand. There are three things that are brothers: the fish and my two hands. *It* must uncramp (p. 55 l.19)
4. If *it (my right hand)* relaxes in sleep my left hand will wake me (p. 72 l.15)
5. Then *our true work* begins. (p. 76 l.6)
6. …he (the old man) commenced to pull on it (the line) gently with his right hand. *It (the line)* tightened, as always. (p. 77 l. 22)
7. He watched only the forward part of the fish and *some of his hope* returned. (p. 95 l.21)

主語に受動者(対象格)を持つような能動態を受身構文の代りに選ぶの

は、Hemingway の informal (砕けた文) の表現の使用という主張についての証明となっている。会話、ディスカッション、戯曲等の中の受身構文の低い頻度数は、J. Spartvik の研究によっても証明されている (Spartvik 19)

次に Type II について述べると、このタイプの 'two-place verb' の型の文 (Agent+Verb+Patient の構文の中の A の符号のつく Type II A e.g. We caught big ones everyday for three weeks.) は、全タイプの数 (2064) の中、最も顕著なタイプであり、現代作家としての文章作法の特徴を示している。この Type II では Agent (動作主) と Patient (受動者) に焦点が当てられ、一文の中に三つ四つの変項は、あまり入れないのである。Type II の中の 'one-place verb' Type II O (e.g. You can't fish and not eat.) のほとんどは、表層構造では、S+V(alone) に入るものである。Type II O (S+V) の場合には、目的語を表わす名詞 (句) が表層構造には表出されていないのである。それは、その目的語に当る語が動詞の意味の一部として理解されるからである。例えば、*row, fish, drink, sing, fight, gamble* 等の動詞や、話の前後の文脈から Patient が判断できるような動詞、例えば、*borrow, do, say, bury, beg, strike, tell, wash, play* 等の動詞をあげることができる。

Type III (主語の名詞が道具格) について、次の様に言えるだろう。Hemingway は、人間の活動に通常言及するような動詞 e.g. *find, kill, beat, cut, hold, do* 等を選び、老人が魚や自然と戦う様子、状況や場面の描写のために作家は、新鮮な表現を創造しようとしているのがわかる。

1. Eat it so that *the point of the hook* goes into your heart and kills you, he thought. (p. 36 l.6)
 2. He had pushed his straw hat hard down on his head before he hooked the fish and *it (his straw hat)* was cutting his forehead. (p. 37 l.22)
 3. *The sack* cushioned the line and he had found a way of leaning forward against the bow…… (p. 39 l.3)
 4. Back in the stern he turned so that *his left hand* held the strain of the line across his shoulders (p. 69 l.23)
- cf. he pulled the dolphin in *with his left hand*,…… (p. 64

l.14)

he picked it (the flying fish) up *with his left hand*.....

(p. 77 l.9)

He lifted some sea water with *his left hand*..... (p. 80 l.4)

5. Finally *his left hand* found the line..... (p. 73 l.20)
6. *The speed of the line* was cutting his hands badly..... (p. 74 l. 14)
7. *The shaft of the harpoon* was projecting at an angle from the fish's shoulder..... (p. 85 l.24)
8. *The hands* have done their work..... (p. 90 l.10)
9. The water was white where *his tail* beat it..... (p. 93 l.19)

1. But *his left hand* had always been a traitor and would not do what he called on it to do and *he* did not trust it. (p. 62 l. 22)
2. *My right hand* can hold it (line) as long as it is braced, he thought. If *it (my right hand)* relaxes in sleep *my left hand* will wake me as *the line* goes out.
3. ...*he* braked all he could *with his right* and *the line* rushed out. Finally *his left hand* found the line and *he* (the old man) leaned back against the line and now *it (the line)*, burned his back and his left hand, and *his left hand* was taking all the strain and cutting badly. (p. 73, l.19)
4. *The old man*.....then drove the knife on the oar down into his brain. But *the shark* jerked backwards as *he* rolled and *the knife blade* snapped. (p. 102 l.17)

以上四つの例文から推して、次のことが言えるだろう。「Hemingwayは主語の選択を意識的に試みている。」主語の焦点をかえるのは、単純で平凡な出来事の中に、スピード感と緊張感を読者に感じさせるために、Hemingway が時間をかけて練り上げた結果出来上ったといえる。彼が S + V + O という単文の文型を多く用いる上で、どんなに主語と動詞の語彙の選択に工夫を凝らしているかがうかがえるのである。Hemingway 自身

が文体について次のように述べている。「作家は人の文体を模造するような良心を断じて持つてはならない。そうかといって、それは文体効果を求めるために文法あるいは、統語論上の規則を破ることを意味するのではない。」(Waldhorn: 1972:31)

以上、この簡単に述べた分析の例は、あくまでも言語研究の一部、言いかえれば、言語学と背中合わせのものでしかない。文体の問題を研究するに当って、文学研究の目的のために言語学を手段として使うのか、その逆に、言語研究のために文学作品を手段に使うかの問題がある。文体論は、この二つの研究方法が互いに交錯する領域で、言語研究者がもっとも苦しむ古くて新しい問題領域といえる。

通常、文体論研究では〈何〉(What)についてよりも、〈いかに〉(How)表現しているかという問題に興味がある。何かの出来事や事実があって、それらをいかに適切な言葉で伝えているかというより、むしろそのレベルを越えて、この作品の真実(e.g. 老人が海と人生に立ち向っていく姿、彼の苦しみ、悲しみ、そして彼にとって《生きる》こと等)が、作家の新しい言葉の創造によって実際に見えてくるということを、講読で強調する必要がある。例えば『老人と海』の場合、Hemingway が人生、生きること、戦うといった問題を考え、それを読者に示すときには、何かすでに現実の事実を描くというよりも、むしろ彼自身が長年の厳しい自己訓練から生み出した言葉の創造力、すなわち彼の文体という皮袋を通して、作家の考えやイメージが浮き彫りになって出てくるということを学習者に気づかせることである。作家の言葉によって切りとられたものは、我々読者に新しい〈見える〉世界となってくるのである。読者の感覚を呼び起すことができるような新奇な語句、又は表現によって、今まで平凡にみえていた現実をもう一度新鮮に生きかえらせること。この作家の技を学習者に感知させるために、この文体論的研究という方法があるのである。種々な文体論的アプローチを教師が認識し、言語教育の中でそれを生かすことは、文学作品への親近感を持たせてくれる。語学教育で実用面だけが強調される時には、文学的要素の重要性について疑問視する傾向があるし、他方、文学はその神秘的な文学性を保持するために言語研究や語学学習から切り離すべきであるといわれるかもしれない。しかし、今日必要なのは、それと逆の態度を取ることであろう。文学のメッセージ(内容)面だけの研究ではなくて、

言葉に対する感性を磨くことによって、今まで気がつかなかった真実が見えるようになってくるのである。そして、そのことは、教育の場に人間性を取り戻すことにつながると思う。この真実で新しいものへの感動と発見なくしては教育を活性化する道はないのである。日常生活の会話においてすら、人々は意志の疎通を行うのに、しばしば曖昧で、神秘的で、時には新奇で、突飛な言い方をすることがあることを、語学教育の場でも実感すべきである。そうすることによって語学教育に人間的な幅と深さが出てくるのではないだろうか。

参 考 書

- 片岡徳雄『子どもの感性を育む』NHK ブックス, 日本放送出版協会, 1990.
 Koiwai, Kayoko "Linguistic Traits in the Use of Verbs in Hemingway's Work," 『英語英文学新潮』(1990年版) ニューカレントインターナショナル 発行, 1990.
 Widdowson, H.G. *Stylistics and the Teaching of Literature*, Longman, 1975.